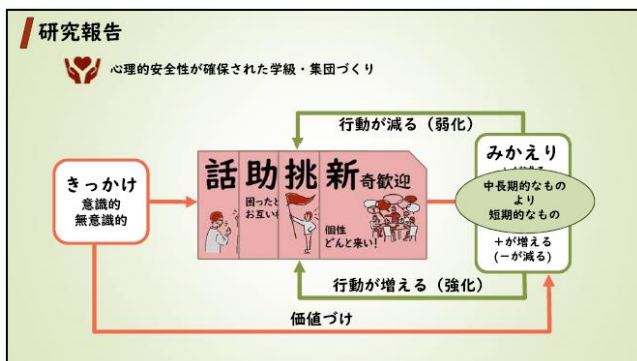


さざなみ

後期運営委員会

須崎市教育研究所 発行
第15号 令和7年1月31日

1月23日(木)に須崎市教育研究所の後期運営委員会を行いました。開会にあたり、竹内教育長より「今年度、市内各校での研究を進められたことは学校の協力があってこそ。感謝を申し上げたい。本市が進めているMake“IT”Funの推進にも関わる心理的安全性、不登校未然防止についてさざなみでも発信があった。今日の発表でも触れられると思う。忌憚のないご意見をいただければと思う」とお話がありました。



研究報告では、これまでさざなみで発信してきたことを中心に、分析した結果や成果・課題をお伝えしました。

心理的安全性が確保された学級・集団づくりについては、実践こそできていませんが、現在学級を持たれている先生方への聞き取りの結果から「共有と価値づけ」によって心理的安全性の高まりが期待できると考え、そのプロセスをスキナー

の応用行動分析に当てはめて分析しました。簡単に言うと、増やしたい行動の直後に肯定的なフィードバックを増やすことで、心理的安全性を高める「行動」を増やすことができている、ということなのですが、この「肯定的なフィードバック」の部分が「共有」や「価値づけ」なのだろうと考えました。

常にこれを意識した指導をすることは難しいかもしれませんが、自身の指導を振り返ったりうまくいかず悩んだりしたときに、きっかけやみかえりを見直すことは有効な手段だと思います。

研究報告
個別最適な学習を実現する複線型の授業づくり

成果

- 授業の多くの時間を生徒が活動する時間に充てられ、教師は困っている生徒のサポートにまわれた。
- 積極的に理解しようとする生徒の動きが顕著になった。

課題

- 学力の定着度をどのように確かめるか。
- 学習意欲の低い生徒との関係づくり及び指導に困った。
→本来この形態でやるべきではなかったか。

研究報告
個別最適な学習を実現する複線型の授業づくり

見通しをもつ

- 授業のゴールを明示
- 学習する道具を提示
- 計画を立てる

学習活動

- 学習形態の選択
- 教師の介入
- 他者参照(白紙共有)

振り返り

- データで残す
- フィードバック
- 学び方の反省

複線型の授業づくりについては実践もさせていただき、現段階で成果として考えられることと課題をまとめました。教科の特性もあれば、教科の中の単元や題材によっても子どもたちに預けやすい場面とそうでない場面があると思います。活用するツールもどれが適しているかはそれぞれ異なるかもしれません。今回思ったのは、教材と目の前の児童生徒のことを深く理解することが欠かせないということです。「複線型の授業」と聞くとタブレットで単元構想シートを使って、自由に学べる空間を使って…と目に見えて分かりやすい部分に時間をかけたくなりませんが、教材理解と児童生徒理解にこそ、いちばん時間をかけるべきだと感じましたし、それに時間がかけられる環境になればいいなと思いました。

研究報告



不登校・不登校傾向の児童生徒に係る諸問題の改善

成果

- ・教育支援センターに通う児童生徒と関係づくりができ、支援センター内の子ども同士を繋ぐこともでき

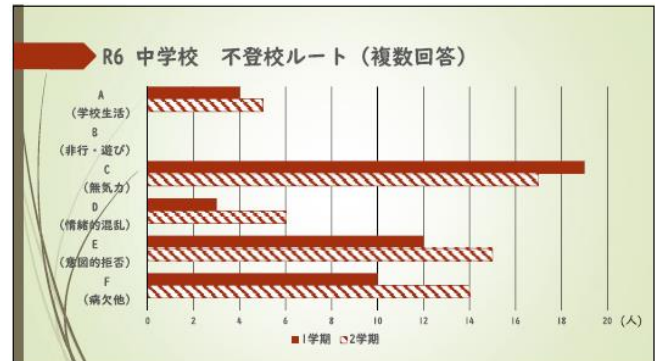
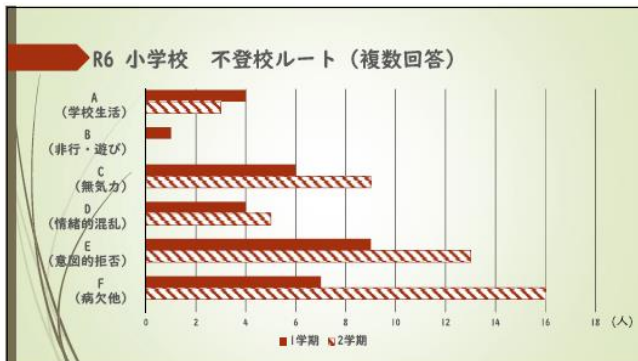
- ・対策委員会にお呼びした講師から学べる

課題

- ・欠席調査の対象者の基準を県の調査に合わせた結果、不登校傾向の児童生徒が対象から外れた。
- ・支援機関に繋がれていない不登校児童生徒がいる。

例
1学期：9日欠席
2学期：10日欠席
1、2学期合計5日欠席
3学期で24日欠席等

不登校については、教育支援センターと連携したり不登校・不登校傾向対策委員会で講師の方にお話しいただいたりすることで様々な学びがありました。また、毎学期ご提出いただく「欠席遅刻調査」から児童生徒の欠席状況や児童生徒の様子、欠席理由を見ることで傾向等も読み取ることができました。



欠席理由を不登校の理由（ルート）に当てはめると、小学校では病欠等の体調不良が多くなっています。次いで意図的拒否や無気力、となっていますが、学年で見ると、F（病欠等）に当てはまる児童は2年生が最も多くなっています。一方、C（無気力）に当てはまる児童は6年生が最も多くなっています。

欠席遅刻調査では「体調不良により休んでいる」となっていた児童が、教育支援センターには元気な姿で通室できているという例もあります。飽くまで推測ですが、勉強面や友人関係で抱える小さなモヤモヤやしんどさをうまく言語化できない低学年の児童は体調不良という形で訴えを出しているのではないのでしょうか。そして、学習が難しくなったり、周りのことが見え始めて他者と自分を比べたりする中で自己肯定感が低くなった高学年ほど無気力になってしまっていると考えられます。

中学校では圧倒的に無気力が多く、小学校同様、学習や人間関係が複雑になることにより自己肯定感をもちづらく、無気力な生徒が多くなっていると考えられます。また、2学期にはE（意図的拒否）やF（病欠等）も同じように増えてきています。特に2年生でE（意図的拒否）が増えてきており、思春期の心の動きの影響もあるのではないかと推測されます。

これは小中どちらについても言えることですが、体調不良を訴える児童生徒の中には、前日の夜まで学校に行くつもりで準備をしているが朝になると頭痛や腹痛を訴える情緒混乱型の児童生徒もいるように思います。一概には言えませんが、情緒混乱型のお子さんは、これまで一生懸命やってきたことが十分認められなかったり、小さな挫折を積み重ねていたり、「こうあるべき」という理想が高くそこに到達しない自分のことが許せないという場合が多いという話も聞きます。

様々な状況の子どもたちがいる学級ではありますが、先生が子どもたちの姿を肯定的に見ることや、当たり前と思わずに承認したり褒めたりすること、そして、子どもたちどうしがお互いを認め合う雰囲気をつくることが不登校を未然に防ぐことになると考えました。

最初の教育長のあいさつの中にもございましたが、学校から離れての研究でしたので、学校現場の先生方のご協力無しで今回の研究を進めることはできませんでした。ありがとうございました。現在研究紀要を編集しているところです。完成した際にはご一読いただければ幸いです。